

誰ひとり取り残さない、 みんなが主人公になる社会に

～あなたの学びの一步が、水平線の先にある未来につながっている～

私たちはみんな、かけがえのない大切な存在です。人の価値は、どれだけ早くできるか、どれだけ多くのことができるか、どれだけ周りの役に立っているかで決まるものではないはずです。わたしが、わたしとして生きていることそのものに、大切な意味があるのだということを、このモデル事業で出会った多くの人々から教えていただきました。

障がいがあることで、思うようにいかなくて、辛い思いをしてきた方がいます。「できないこと」に目が向けられ、自分に自信が持てなくなったこともあったことでしょう。でも、自分がこれまで感じてきたこと、乗り越えてきたことは、どれも自分の大切な人生の一部です。それは、誰とも比べることのできない、自分自身の歩みなのです。

人は生きていれば誰もが、病気や失敗、人とのすれ違いなど、挫折しそうになる出来事に出会います。そんなときには、「どうして自分だけがこんな目にあうのだろう」と思ってしまいます。でも、その経験は、決して私の値打ちを下げるものではありません。むしろ、そうした経験をした際にこそ、「自分はどう生きたいのか」「何を大切にしたいのか」を考えるきっかけが生まれるに違いありません。その人にしか見えない大切な意味を発見することができることを、多くの人の体験から教えてもらいました。

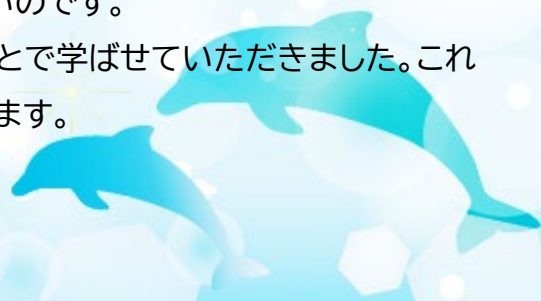
『生涯学習』は、知識や技術を習得するだけのためのものではありません。自分達の思いや体験を言葉にし、仲間の話に耳を傾ける相互的な活動です。たとえ上手に話せなくても、ゆっくりでも、あなたのペースで大丈夫、あなたの声には、あなたにしか語れない大切な力が宿しているはずです。

『生涯学習』の場では、あなたの話が誰かの心を癒し、誰かの勇気になります。そして、それに応える仲間からの話は、あなたに新しい気づきや、安心を与えてくれるはずです。人と人との交わりやつながりの中で、私たちは少しずつ、ほんとうの自分を発見していくのでしょうか。

あなたの学びは、何かの役に立つことだけを目指すものではありません。あなた自身が、自分らしく生きていくために大切にしたい時間なのです。できることが増える喜びも大切ですが、それ以上に大切なのは、「自分はここにいていい」、「自分には大切な存在としての意味がある」と実感できることではないでしょうか。『生涯学習』は、あなたがあなたの人生の主人公として、長い人生行路の羅針盤を獲得していくための営みです。だからこそ誰ひとりそこから排除されてはいけないのです。

こんな思いを私たちは 4 年間、障害者の生涯学習事業に取り組むことで学ばせていただきました。これからも「交わり・つながり」を通じて活動の輪を拡げていきたいと思います。

さあ皆さんと一緒に、たのしく『生涯学習』いたしましょう！



記念講演会のエッセンス紹介

令和 8 年 1 月 29 日(金)に新居浜市総合福祉センターで行われた市民啓発講演会の要旨を紹介します。今回の講師は、文部科学省で障害者の生涯学習を担当していた、長野県社会福祉協議会の福澤 信輔さんです。演題は「福祉と教育が手をつなぎ、誰ひとり取り残さない生涯学習社会をつくる」でした。前段は、アドバイザーとして文部科学省事業の行政説明、後半部分では福澤さん達が長野県で取り組んできた実践を紹介いただきました。以下その講演のポイントをお伝えします。



①福祉と教育(学習)を分けて考えず、地域の日常の中で相互に結び付けながら、人と人との関係性の中で育まれるものとして捉える。学びとは知識の習得にとどまらず、「出会い」「気づき」「価値観の更新」によって生まれ、その過程が福祉の実践でもある。

②生涯学習とは一人で完結するものではなく、他者との関係の中で生まれ、自分の引き出しを増やし、視野を広げていく営みである。

③福祉は特定の人へのサービスや「与えられるもの」だけではなく、「ふだんのくらしのしあわせ」だ。誰もが安心して暮らし、幸せを感じられる状態そのものが福祉であり、その実現に向けた地域づくりが重要である。この視点は、国が掲げる「地域共生社会」や「ウェルビーイング」とも重なる。

④金澤 翔子さんの一人暮らしと商店街での生活、カフェの開設の話では、買い物や日常のやりとりを通じて、人々が自然に見守り、関係が育まれることで、当事者の自立や自信につながるだけでなく、地域側の意識や関わり方も変化した。日常の場の中で相互の理解と信頼が育つことが重要である。

⑤長野県内の「カエルの家」は引きこもりや精神的な困難を抱える人が安心して集える場だ。「普段の暮らしの不幸せ」を語ることが許されることで、人々の安心や回復のきっかけになる。自分の気持ちが整理され、他者の経験に触れることで、「自分だけではない」と感じられることが、学びと回復のプロセスにつながる。

⑥地域活動支援センターの事例では、精神障害のある人だけでなく、地域住民も参加できる講座や活動を通じて地域に開かれた場となり、施設利用者が地域の人から相談されたり、役割を担うことで、支援する・されるという一方向の関係ではなく、相互に支え合う関係が生まれている。

⑦災害復旧の現場でのリンゴ農家と障害のある人たちの協働では、共に作業する中で、偏見が驚きや尊敬に変わっていく過程が語られた。実際の活動を通して、「できない存在」という固定観念が崩れ、人として認め合う関係が生まれることが、価値観の変化と学びにつながる。

⑧トイレ利用をきっかけに生まれた「まちなかセーフティネットマップ」では、当事者の困りごとを出発点として、地域全体に役立つ仕組みが生まれる事例が紹介された。当事者は単なる支援の対象ではなく、地域の課題解決の担い手として位置づけられる。

★学びや居場所づくりは、教育分野か福祉分野かという領域区分ではなく、当事者にとって「行きたい」「必要だ」と感じられる場であることが最も重要だ。思いを共有する人たちが協働してつくっていくことが大切である。地域の中にすでに存在する実践や関係性に光を当て、それを生涯学習として意味づけ、広げていくことが、これからの地域づくりにおいて重要な視点である。

『口で描く画家』という夢との出会い

田中 潤也



僕が、歩んできた日々、そして口で書く画家という夢に出会ったきっかけについてお伝えしたいと思います。

僕は小学校2年生の春、交通事故に遭い、9日間行き知り不明の重体になりました。目を覚ました時はベッドの病院のベッドの上でたくさんの機械やチューブにつながれて、なんでこんな所にいるのだろう。体がすごくしんどい。何で手足が動かない。頭の中はなんで？どうしてのパニックでいっぱいでした。先生や両親から事故に遭ったと聞いた時も、みんな何言っているのと信じることができませんでした。僕は泣きました。でも、人工呼吸器を着けているから声が出ない。涙があふれるだけ。手も動かないから、涙も自分で拭けないのです。初めて自分の現状を知った瞬間でした。

しかし、希望の中に小さな光がありました。それは頸椎を損傷しているのに、手や足の先まで感覚があるのです。先生たちはびっくりしていました。手や足は動かないけれど、ずっとずっと握ってくれていた母の手は温かかったです。それに舌打ちだと音が出るのです。しんどい時、つらい時、助けを求めたい時、舌打ちをチッと音を出すと、誰かが気づいてくれる。たったそれだけのことがすごく嬉しかったです。

僕は決めました。絶対諦めない。できなくて当たり前。今できることをやろうと。それは家族をはじめ、主治医の先生、看護師さん、リハビリの先生、たくさん関わってくれる人たちが僕のためにできることを探してくれたり、医療を考えてくれたり、何より気持ちに寄り添ってくれるのです。

僕は最初から今の声が出たわけではありません。普通は人工呼吸器をつけると声を失うと言われています。でも、僕はどうしても自分の思いを伝えたくて、夜中に一人で声を出す練習をしていました。

そしてある日、ついに声が出ました。初めて出した声は「ママ、ママ」でした。お母さんは僕のベッドの下で寝ていたのですが、声に気づいて飛び起きました。笑っているのか、泣いているのかわからない顔で涙を流していました。この奇跡は、僕一人の力ではありません。先生たちが喉に入れているカニューレの形状や種類などを探してくれたおかげです。その当時、人工呼吸器をつけて声が出るのは、医学的にも非常に珍しいことでした。すごくみんなが驚いていたし、喜んでくれました。事故に遭ってから、声に出して気持ちを伝えられない時間がとにかくつらかったので、本当に嬉しかったことを思い出します。

頑張る、諦めないと決意をしたけれど、初めの頃はいつも夜中になると病院の天井の黒い模様を数える日々でした。毎日思っていたことは、生きている意味もわからなくなって。なんで僕はこんな体で生きているの？夜中中、声を殺して泣いた時もありました。思いもつかなかった体になって、どう生きたらいいのかわからなくなったのです。あの時、事故に遭っていなかったら、どんな人生だったのだろう。どんな思い出ができていたのかなって考える日々でした。入院生活は約半年に及びました。

お母さんは毎日病院に泊まってくれて、家族も毎日病院に来てくれ、そして友達や学校の先生も手紙を持って来てくれたり、どれだけたくさんの人に愛情を頂いたか、ただただ感謝でしかありません。そんな時、人工呼吸器をつけて、自宅に帰った前例がないと分かりました。しかし、地域の力強いサポートがあり、病院関係者をはじめ、市役所の方々、学校、福祉関係者、そして新たに受け入れてくれた地域の人、リハビリ病院、本当に多くの関係者の方が、僕が自宅へ帰るという一つの目標のために動いてくださったのです。今でこそ在宅医療や福祉の支援体制など、取

り巻く環境の理解が進み、学校での受け入れや在宅に帰る選択肢が広がっていますが、当時は自宅へ帰るという選択肢すらなかったです。そして、僕は多くの方々の協力のおかげで、小学四年生の時、地元の小学校に帰ってくることができました。

もう本当に嬉しかったです。当たり前前の時間は当たり前ではないのです。学校に通ったり、友達と遊んだり、子供らしく生活が送れる時間。自宅のベッドで寝れる時間。とにかく一つ一つが幸せです。でも、みんなに再会するまでは、こんな体になった僕をどう思うだろうとすごく怖かったです。

一緒に自転車に乗って公園に行ったり、キャンプに行ったりしていた友達。前日は不安で、不安で寝れなかった。でもそんな心配をよそに以前と同じようにしてくれる友達。「頑張ったな」とか「待っていたよ」とか「一緒に遊びたいから早く帰ってこいよ」とか、それから色々、この日のことは僕が辛いことがあっても、頑張っただけの原動力になりました。

そして、小学校 4 年生の冬に習字大会がありました。先生に「この筆で書いてみて」と言われ、初めて書いた文字は友達の「友」という字でした。でも最初は悩みました。口に筆をくわえて友達に汚いと思われないか心配でした。でもその心配をよそに、友達はずっと「すごいな」と言ってくれました。「字が書けるなら、絵も描けるはず」——その言葉が私を絵の世界へ誘ってくれました。

小学校 5 年生の時、愛媛県美術館で開催された「口と筆で描く芸術家協会」の展覧会に行きました。その時、実演で来られていた口で描く画家・牧野 文幸さんに出会いました。口で描いて実演をする画家の牧野さんは、りんとしていてカッコ良かったです。僕はその姿を見て、体が動かなくなって不安に思っていた気持ちが吹っ飛びました。そして「画家になりたい」という夢もできました。手や体を動かして友達と同じことはできないけれど、僕には口で食べることも絵を描くこともできるんだと思い、自信をくれました。

そして高校は、しげのふ特別支援学校に進学しました。本当は普通高校に進学したく勉強しましたが、バリアフリーの壁にぶち当たり、学校の階段に上る昇降機が入らないということが分かり、諦めました。とてもつらかった。僕は高校 1 年生の時、美術の先生に「僕の将来の夢は画家です。画家になるため勉強を頑張るのでご指導をよろしくお願いします」と言ったのを覚えています。高校 3 年生の時、担任の先生が今僕の所属している「口と筆で描く芸術家協会」のことを教えてくれました。今となっては特別支援学校に行っただけだからこそ、人との出会いがあり、今のチャンスを掴んだのだと思います。

人生たとえ進む道が外れた時でも、自分の置かれた場所で頑張っていたら、いろんな人との出会いやチャンスがあるのだと。生きているとつらくて苦しいこともいっぱいあるけれど、でもそれ以上に楽しいこと、嬉しいこと、幸せの方がたくさんあることに気づきました。

現在、僕は車椅子での生活を送り、日常の多くの場面で人の助けを借りています。確かに不自由なことはたくさんあります。自分一人では行けない場所、手に取れないものもあります。しかし、僕は決して不幸ではありません。多くの人に助けてもらいながら美味しいご飯も食べ、おしゃべりを楽しみ、飛行機に乗って旅行にも行けます。3 年前には兵庫県宝塚市で、そして去年の 5 月には今治市で念願の個展を開催することができました。

たくさんの人の手を借りるということは、それだけたくさんの人の温かさに触れるということでもあります。今の僕は、この人生を悪くない。いや、この人生だからこそ見える景色があるのだと胸を張って言えます。僕はこれからも口で描く画家として、そして映像クリエイターとして、一步一步前進していきます。僕の描く絵や活動を通して、どんな現状にあっても、可能性は無限にあるということを伝えていきたい。いつかもっと多くの人に認められる画家になるため、これからも努力を続けていきます。これからも、この温かい夢を現実に変えられるように頑張っていきたいと思います。

響きあう時間 ～和太鼓のたのしさ～

メンバーが太鼓の前に立った瞬間、空気が変わった。指揮の篠原さんの合図で「ドーン」と大きな音が鳴り響く。ホールの戸板がビリビリと反響し、奥の倉庫でモップが倒れるのが見えた。「すごい迫力」という言葉しか出てこない。

演奏するのは、メインメンバーの4名とそのご家族。メインメンバーは、大きな二つの太鼓に向けて、バチを力強く振り下ろす。一曲ごとにバチを持ち替え、3曲を合計10分ほどで演奏する。気持ちよく揃った音と安定したテンポに、「どうしてこんなに上手に演奏できるのだろう」と不思議に感じるほどだった。

演奏し終わると、メインメンバーが時計回りに移動する。その間、篠原さんに「失礼ながら、これほど本格的だと思ってなかった」と伝え、ふふっと笑いながら、約30年になる歴史と、太鼓の先生の教え、ご家族が「まず自分たちが演奏できるように」と厳しい練習を重ねて修得し、さまざまな工夫をして子どもたちに伝えていったこと・・・を早口で教えてくれた。

その言葉に、はっとした。そう、この「今の『できる』姿」は、何千時間の積み重ね——「できない」ことを、どうやったら「できる」ようになるかを手探りした膨大な時間——の上にあるのだ。自閉症の人は、感覚や記憶が鋭敏な分、変化を受け入れるまで時間がかかる。意思が強く言葉の指示では納得しにくい。あらためて見ると、「左右平衡の動きは?」「音の強弱は?」「繰り返しのカウントは?」と、「できる」ようになった練習過程について、とめどなく質問したいことが湧き出てきた。

この日の演奏では、指揮者がサインを出したり、家族メンバーが音を足したりしていると説明された。それは、篠原さんにしたら「家族メンバーによるサポート」と呼ぶものかもしれない。でもわたしには、その動きも音もすべてが違和感なく存在して見えて、その洗練された一体感のある演奏に引き込まれた。みんなで良い音を響かせるために、技を磨き、表現する太鼓演奏集団——その感覚を裏付けるように、わたしの「大変な道のりだったでしょうね」という言葉に、篠原さんは「自分も楽しいからやれるんだけどね」とカッコよく微笑んだ。

片付けながら、家族メンバーと話していると、「この活動が生活の張り合いになっている」と仰っていた。聞けば、はじめはほんの短い時間しか会場にいらなかったらしい。それが今では「なくてはならない活動」だという。ご家族のみなさんは「もう歳だから、いつまでやれるか分からんね」と仰っていたが、わたしは「その先」を尋ねることができなかった。不安も願いも、ないはずない。この活動がいつまでも続くために、家族が頑張るだけの社会ではいけないはずだ。

「できる」をつくりあげていく試行錯誤は、たやすくはない。その繊細なプロセスを無視して「一緒に楽しもう」とかける言葉は、とても無神経に感じられる。わたしたちが共有すべきは、一時的な楽しさではなく、伝え合うこと・分かりあうことの難しさ、それを乗り越えていく喜びなのかもしれない。倉庫には、メンバーが子どもの頃に使っていた小ぶりのバチがしまっていた。径は細く、左右の色を変えて、指導者の動きを真似やすくしてあった。当時の苦労も工夫も、ここにずっと残してある。この知恵と想いを社会で分かち合いたいと強く感じる。「共に生きる社会」づくりのために、いや、この素晴らしい太鼓の音を、ずっと聴き続けられるように。



みんなの公民館 “おかけや” というチャレンジ

「おかけや」は、障害者総合支援法に基づく地域活動支援センター事業として13年目を迎えるが、4年ほど前から、週に3回東温市内の公民館で活動している。場所を伝えると「福祉センターではなく、公民館で？」と驚かれることが多い。福祉関係者からも社会教育関係者からも「社会教育施設で、なぜ？」と不思議がられる。



では、公民館は、誰が利用する場所なのだろうか。さらに言えば、利用者として想定される「地域の住民」に、障害者は含まれていないのだろうか。

車椅子ユーザーの友人が、「自分たちはそこに暮らしているのに、まるで『いない』かのようにまちが作られている」と嘆いていた。介助者がいても難儀する段差、手が届かない商品棚、テーブルにつくことを阻む固定された椅子——車椅子ユーザーの存在は、想定されていもない。わたしたちが公民館で活動するのは、施設・設備の使い勝手以上に、さまざまな障害を持つ人たちが、「ここに暮らしている」と伝えていくためでもある。

そして、これまで家庭・学校・事業所に限って過ごすことが多かったメンバーたちが、「公民館」というパブリックな場所で、少しでも緊張感を持ちながら、社会とのつながりを深めていくところに、大きな可能性を感じている。わたしたちが活動していると、どこからかコーラスの歌声が聞こえてくる、オカリナの音が聞こえてくる、ロビーのガラスケースに書道作品を展示している人がいる、体育館の予約をしている人がいる。中には、「おかけやって、何のグループですか？」と部屋をのぞきこむ人もいれば、「書に興味があれば、教えに行きますよ」と声をかけてくれる人もいる。公民館らしく、求めれば、学びとつながりは得られるのだ。そのうち、メンバーから「わたしたちも作品展示してみたい」「実は歌うのが好きで、みんなでカラオケに行きたい」という声が聞こえたりする。このまちには、自分たちと同じように、仲間と集い、何かを学び、愉しんでいる人がいるということをお互いに理解していくことができる。

この冬、地元で美術ワークショップを多数手がけるアーティストに依頼して、新居浜&東温のメンバーで「ダルマの顔入れ」体験を行った。その後、口で絵筆をとって絵を描く画家の講演を聴いた。どちらの講師も、自ら「共に学び、共に愉しむ時間を創りたい」と名乗りを上げてくれた人たちだ。「どうやったら楽しめるだろうか」「どうやったら伝わるだろうか」と心を砕いてくれた。会場の公民館は、決してバリアフリー環境が整備されているとは言えないものだが、駐車場に停まった大型バスのリフトに驚く来館者や講演を見守る職員に、この場所が「みんなの公民館」であること

とは伝わったはずだ。

学びたければ、公民館に行く。それは地域の当たり前の光景である。生涯学習社会においては誰にとっても保障される権利である。行けば自分の人生を豊かにする学びの世界が広がっている。だからもっと出かけて行こう。ここから「共に生きる社会」が創られていくと信じ、「みんなの公民館」にするために。



発行 包摂の新しい学び創造委員会

事務局 〒792-0023 愛媛県新居浜市繁本町8番65号 新居浜市生涯学習センター内

☎ 0897-33-2991 メール n-daigaku@city.niihama.lg.jp